

53 近代上海における岸田吟香の医薬事

業について（一八六〇～一八九〇）

丁 蕾

二十世紀に始まった日本の対中医療事業活動は、西洋の医療伝道活動に終始対抗する側面を持った。その前に、同仁会の創設メンバーの一人である岸田吟香は、すでに上海を始め、中国各地で売薬・診療活動を行っていた。岸田は西洋の医療活動に対抗の手段を取ったのか、医薬事業の主要拠点である上海を焦点に探ってみたい。

岸田が上海で精錡水の取次ぎ所を設けたのは一八六八年二月であるが、一八六〇年代から上海はすでに西洋の医療伝道活動の中心地になり、プロテスタント教会を中心に、幾つか病院が設立された。有名なのは仁濟病院、同仁病院、体仁病院である。その三病院は共に自治的・慈善的な運営手法を取った。地元の新聞で士紳階級と欧米人に寄付を呼びかけ、無料診療、貧民に経済的援助を

行う。診療科目は眼科・外科・種痘に集中し、診療対象は中国人中心。仁濟病院と同仁病院の外来患者数は連年増加し、一八六九年は四万四百一十一人と六千二百人で、一八七五年に仁濟は五万六千六百二十四人で、一八七七年に同仁は一万六千人である。

西医は一見隆盛だが、民間は依然中医を利用する傾向であった。一八六五年の上海の総人口は六十九万九千九百十九人である。一八六九年の二病院の患者数を以って西医の診療を受けた人の割合を計算すれば、六・七%ぐらいしかない。その他カトリック教会の病院と小規模の診療所を入れて推測しても、せいぜい十%ぐらいになる。

『申報』（一八七二～一八九〇）から現地民衆の医療への反響を見ると、「西医は外科・中医は内科」という論争が展開され、西医を疑う人がまだ多く存在したらしい。それに対して、西医は外科医術、慈善主義的な運営方針、職業上の責任感で好評を得、中医の種々不良現象と対照的になっていた。西医は厳しい受け入れの状況下で、一定の生存空間を手に入れた。

その時期に、一八六二年六月に千歳丸で上海に來た日

本の藩士たちが、中国觀察記に欧米が医療慈善事業を以つて、中国と親交を結ぶことに強い警戒を持った。同じ危機意識を持った岸田は一八八〇年三月に、上海で「樂善堂支店」を開設、診療兼売薬の中医の経営方式を取った。一八八〇年五月に「淡々社諸君に充てた手紙」に、「…支那においてはどれほどよい品であっても、西洋の品と言えは捨て顧みず、急病にて死に至るのも西洋の奇薬と言えは命の助かることは知っても服用しない風習がある。もし中国古代から伝わった秘方で太乙真人の妙薬と申せば、必ず喜んで服する。」と、西洋の薬を受け入れさせる手法を披露した。そして洋式目薬の精錡水を、漢方薬のように『申報』の広告で説明・宣伝した。そのため、上海の人は彼を中医の名医として認めた。「吟香氏は東洋医学に通暁しており、…販売された各種の薬は、すべて重要な経絡に基づいているため、効かないものはない。」（『申報』一八八八年十月二十三日）という。しかし同じ記事で、彼は中医の形を利用して西医の知識を紹介しようとすることを記した。一八八八年九月十六日に、上海の文人と交流する「玉蘭吟社」の第四回目的

会合で、臓器を形取った紙を体内の順序に従って貼り合わせた人体図が披露された。「折畳明堂内外全図は日本岸田吟香先生が手で製造したものである。一冊の本に似ており、開いて中を見ると、人形が二面を為している。

…裏面には五臓六腑、十二経絡を縛っており、素問の人の五臓は背中に縛っているという説に基づく。外は脇骨であり、一枚を開けたら、即ち臓腑である。又臓腑は内外の二枚に分け、間に三枚に分けるものもある…」という。

近代上海の医療社会状況をめぐって見てきたように、西洋医療の輸入にとめた医療伝道活動に対し、岸田吟香は中医の伝統基盤を利用し、中医の経営方式で信頼を獲得しながら、西洋の医薬を導入する対抗策を取った。

（国際日本文化研究センター）